



線路が紡ぐ物語

鉄道記念物・準鉄道記念物の18史

写真・文＝原田伸一

鉄道記念物は、歴史ある鉄道財産を後世に残すために日本国有鉄道が1958年に設けた制度である。JR北海道ではこれを引き継ぎ、2010年北海道鉄道130周年を機に新たな指定を加え、記念物は4点に準記念物は14点となった。いずれも北海道の鉄道発展に功績があった動力車や施設ばかり。それらが登場した時代背景をたどりながら、果たした役割などを紹介する。

第6回 【旧手宮機関車庫 (鉄道記念物第1号)】



手宮のシンボルとして親しまれている旧手宮機関車庫三号。手前は転車台

手宮から札幌に、そして八二年(明治十五)、幌内まで五十五・三キロの幌内鉄道が全通し、九月十七日、盛大に開業式が行われた。この間、クロフォードは一時帰国して蒸気機関車や客車を発注して帰って来るなど、精力的に務めを果たす。車両やレールは手宮に陸揚げされ、組み立て技術などが日本人に伝授された。旧手宮機関車庫は現存する一号と三号から成っており、うち三号は八五年(明治十八)竣工で、

鉄道が全道に張り巡らされる一方で、役割が減った手宮機関車庫は廃止され、一九六〇年(昭和三十五)に鉄道記念物に指定された。手宮線も今はないが、同博物館には幌内鉄道の路線測量起点を記念する北海道鉄道開通起点標(準鉄道記念物)のほか、車両約五十両が屋外展示されている。いずれも鉄道史を物語る「証人」で、地元①の北海道鉄道文化保存会の会員

北海道の鉄道は手宮(小樽市)から第一歩が始まった。開拓のため線路が敷かれ、旧手宮機関車庫が車両基地の役割を果たした。小樽市総合博物館の主要展示物である旧手宮鉄道施設は二〇〇一年(平成十三)に国の重要文化財に指定されている。

手宮を語るとき、米国人ジョセフ・クロフォード(一八四二―一九二四)という人物を忘れてはならない。ペンシルベニア州出身の鉄道技師で、開拓使の招きで一八七八年(明治十一)十二月、札幌に赴任。早速、手宮から幌内炭山(三笠市)まで鉄道を開通させる難工事の陣頭指揮を取った。レールは八〇年(明治十三)、



1970年ごろ、小型機C12形が活躍していた旧手宮駅構内

日本で現存する機関車庫としては最も古い。SL義経号やしづか号も出入りした車庫に入ってみると、赤レンガが長い歴史を感じさせる。線路の下に溝を作り、車両底部を下から点検、修繕するピットも復元された。